

歳をとるといふこと

赤谷慶子

六月十四日は誕生日なり。アメリカのトランプ大統領と同じ誕生日なるは實に不愉快なれど詮方なし。近來、癌の患者實に増えたりとぞ嘆かるる。一元勤務先の大先輩たち軒並み「癌友」になりたり。先輩一人、新たに喉頭癌と診断せられ、七月初旬に手術を受けんとの由。微妙なる場所において、聲帯にさへメスを入れるの要ありと申し渡されたり。病と闘ふ「激勵会」なるもの開催せられ、参加したりき。赤坂見附のさるワイン・ダイニングなる飲屋に集合し、美味なる食事に舌鼓を打ちて、さて歸らむといふ時に、大先輩の一人軽くふらつく。ワイン二杯にて酔ふはずもなく、本人によれば最近食事をするや低血糖になり、ふらつく事多しとの由。階段もあり、暫く休むべしとの他の先輩の提案に逆らひ、昔より強情なる先輩は歩き出したり。若き時より運動神経もあり、體力には自信ありや、エレベーターを降り、急なる階段下り始む。地に降り立たとするに及びて、俄かに棒の倒るるが如くに崩れ落ち、煉瓦の道に後頭部を激しく打ち當てたり。道行く人も仰天し、救急車を呼ぶの好意を示したる若き女性もあり、青年醫師なる人、傍らに坐して、様子を伺ふ。曰く、意識混濁すといへども、救急車到着したらんには大事なからんと。所用ありとて辭去せられ、心細きこと限りなし。

扱、警察官二人到着し、事件か事故かの判断をせんがため、我らに問ふ所幾何なり。救急車到着するまで十五分、いと長く感じたりき。手術を控へてありし先輩は歸路に着けど、それがしと先輩一人付添はんとて救急車に同乗せり。虎ノ門病院に赴かんとてなり。車内にて心電圖をとり、血液噴き出したる後頭部を治療するなど更に十五分の時間経過せり。同行する先輩は「かくも遅滞するには、障り生ずるの虞あるべし」と批判がましき言辭を弄す。眞に喫緊の大事なるに、餘りに悠長なるにあらずや。大先輩は十年前に虎ノ門病院にて食道癌の手術を受く。副院長すなはち主治醫なり。名高き名醫とぞ聞く。受け入れ態勢整ひたりとのことにて、救急車は走り出だしたり。到着するや、大先輩は傷口の治療とCTの検査を受けんとて、擔架に乗せられ奥へ運ばれたり。先輩とこことも、廊下にて待機すること二時間。漸う大先輩の三女到着し、我らは解放せられたれども、女性先輩は川越に居住してをり、すでに十一時を廻りたれば、入院すべしとのことにて、我らは歸宅せんとするに、疲労困憊せるによりてタクシーを呼ぶ。車中、患者の長女よりメールあり、CTに異常なければ入院せずして歸宅せんとの由、安堵し、却つて心痛甚だしきものあり。

この大先輩は投薬せられし薬を飲むや否やを獨断にて決めてあり。癌と糖尿病の主治醫は同じ病院にはあらずして、大先輩現状を的確に説明するにあざれば、いづれも病狀を把握すること難からん。データの共有を圖るべきの由、我等は大先輩に進言せり。

齡を重ねれば方々何かと問題の生ずるあり。二元氣なる頃はかかる事態にはならず。重々氣を付けて日々を過す事こそ大事と思ひ知りし出來事なりき。

(平成三十年六月二十二日受附)